

厳しい規制で ウナギを資源管理

日本国内では、シラスウナギの採捕者、ウナギ養殖業者、成長したウナギを河川等で漁獲するウナギ漁業者が一体となって資源管理の取組を進めています。

シラスウナギの採捕期間を短縮

シラスウナギの採捕は、都府県知事が特別に認めた者に限り許可されています。また、河川に遡上するシラスウナギを増やすため、採捕期間をより短くする取組が各地で進められています。



ウナギ養殖業の許可制度導入

平成27年、ウナギ養殖業を営むためには農林水産大臣の許可が必要となりました。国際協議で決まった池入れ（シラスウナギを養殖池に入れること）数量の上限値を守るため、養殖業者ごとに池入れ可能な数量が定められました。

産卵に向かうウナギの採捕を禁止

産卵海域に向かうウナギを増やすため、河川から海に下る時期（10月～12月）のウナギ漁を禁止する取組が各地で進められています。



ウナギ資源保護のため、熊本県が製作したポスター

日本が東アジアをリード

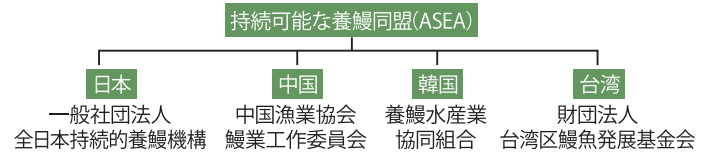
うなぎの大消費国である日本が、東アジアをリードする形で資源管理に取り組んでいます。

池入れ数量を制限

平成24年より、日本の働きかけにより中国、韓国、台湾との国際協議がスタート。平成26年には、以下を内容とする共同声明を発出し、池入れ制限に取り組んでいます。
○平成27年漁期（平成26年11月～27年10月）の二ホンウナギの池入れ数量は、平成26年漁期の数量から2割削減する。
○二ホンウナギ以外のウナギの池入れ数量は、直近3カ年（平成24～26年）の水準より増やさない。
なお、平成28年漁期も、27年漁期と同等の数量制限に取り組んでいます。

うなぎの食文化を守るために

4カ国・地域のウナギ養殖業の民間団体が集まり、民間ベースでウナギの資源管理について話し合う国際的な団体「持続可能な養鰻同盟（ASEA）」を設立しました。



官民一体となって、これからもウナギを持続的に利用し、食文化を守り伝えていくための活動を進めます。



ASEA第1回会合(平成27年6月)

発行：一般社団法人 全日本持続的養鰻機構
東京都港区赤坂1-9-13三會堂ビルB1
電話：03-5797-7690
協力：全国鰻蒲焼商組合連合会
うなぎ百撰

二ホンウナギ —— 持続的な利用を目指して

日本人とうなぎの関わりは、長く深い。日本独自の食文化である「蒲焼き」は、いつどのように生まれ、今日に受け継がれてきたのでしょうか。ウナギ資源を持続的に利用し、食文化を伝えていくための取組について紹介します。

日本人とうなぎの長い付き合い

5000年以上前の縄文時代からのお付き合い

今から5000年以上も前の縄文時代の貝塚から、ウナギの骨が発見されています。このころから、日本人はウナギを食べていたものと推測されています。

「蒲焼き」は200年ほど前に誕生

最初は、丸焼きにしてウナギに味噌を塗って食べていたようです。

蒲焼きは、うなぎを割いて、骨をのぞいて開き、醤油とみりんを合わせた甘辛のたれを付けて炭火で焼き上げる日本独自の調理法です。

今から200年ほど前の江戸時代、蒲焼きを作るために必要な刃物（庖丁）、炭、醤油、味醂の全てが揃ったことで、現在と同じような蒲焼きが誕生したと言われています。



歌川広重「東海道五十三図会 世二 荒井 名ぶつ蒲焼」
弘化4年～嘉永5年(1847～52)



蒲焼き文化を支えるウナギ養殖業

約150年前に始まり、 今では生産量の99%が養殖ウナギ

世界には19種類のウナギがいます。私たち日本人が蒲焼きで食べている多くはニホンウナギ（学名：*Anguilla japonica*）で、生産量の99%が養殖です。

ニホンウナギの養殖は、明治12年、服部倉次郎が東京の深川で始めました。その後、明治30年頃から、まずは浜名湖、次いで東海地方を中心に全国に広がり、昭和40年代には、温暖な四国や九州でも養殖が行われるようになりました。

6ヶ月～1年半かけて大切に養殖

養殖は冬から春、黒潮に乗って日本沿岸にたどりついたニホンウナギの赤ちゃん（シラスウナギ）を河口等で採り、加温された養殖池に入れて6ヶ月から1年半かけて、200gほどの大きさになるまで大切に育てます。

養殖技術の高まりや日々の管理による養殖業者の努力により、今では、養殖池に入れたシラスウナギはほとんど死なせることなく出荷されます。



シラスウナギ



ウナギ養殖場

ウナギの資源管理の必要性

資源の減少が懸念

昭和50年代後半以降、日本で採れるシラスウナギの量は、減少傾向にあります。

減少した要因については、海洋環境の変動、生息環境の悪化、過剰漁獲が指摘されていますが、ニホンウナギの生態にはまだ謎が多く、特定されていません。

同じ資源を4カ国・地域で利用

最近の研究により、ニホンウナギは、5年から15年間川や河口域で生活した後、海へ下り、日本から遠く離れたマリアナ諸島の西の海域で卵を産むことがわかりました。



ふ化したウナギの赤ちゃんは、黒潮に乗って11月～翌年4月頃に日本、台湾、中国、韓国にたどり着き、それらの国・地域でも養殖に利用されています。

ニホンウナギ資源を持続的に利用していくためには、4カ国・地域が協力して資源管理に取り組むことが大切なのです。